

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 2 日現在

機関番号：17101

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2012～2014

課題番号：24720099

研究課題名(和文) 枕草子を中心とした平安文学の章段・段落区分の研究

研究課題名(英文) Study of Division of the end of a paragraph in makuranosoushi

研究代表者

沼尻 利通 (NUMAJIRI, Toshimichi)

福岡教育大学・教育学部・准教授

研究者番号：90587635

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、平安文学の写本・版本の形態から、文章の「区切り」や「段落」がどのように意識されているかを究明した。研究対象としたテキストは、江戸時代の『絵入源氏物語』と『枕草子春曙抄』、陽明文庫本『枕草子』甲本である。これらのテキストを分析すると、それぞれのテキストの理論によって、区切りや段落が表記されていることが明らかとなった。例えば、『絵入り源氏物語』では、改行により区切りが示されることがまま見られ、また『枕草子春曙抄』は、注釈を付すことによって区切れを表すことや、陽明文庫本『枕草子』甲本は、朱丸印、朱合点などにより、区切れがあらわされていることがわかった。

研究成果の概要(英文)：In this study, I studied it how "an end" and "the paragraph" of the sentence were conscious of by the form of a manuscript, the printed book of the peaceful literature. The text which I studied is "eirigenjimonogatari" and "makuranosoushishiyunshiyoshiyo", youmeibunko"makuranosoushi". It was revealed that an end and a paragraph were written by the theory of each text when I analyzed these texts. For example, in "eirigenjimonogatari" storage of where it remained it that an end was shown by a newline, "makuranosoushishiyunshiyoshiyo" expressing an end again by referring an explanatory note and positive clear provision book youmeibunko"makuranosoushi" knew that an end was expressed by a vermilion coin, vermilion understanding.

研究分野：中古文学

キーワード：中古文学 古代文学 文献学 枕草子 源氏物語

1. 研究開始当初の背景

枕草子の章段区分は、類纂的、随想的、日記的と内容により分類し、章段区分をおこなうことが一般的である。しかし、内容を主として区分する章段区分の考え方は、第二次世界大戦後、池田亀鑑によって示されたものである。現在の枕草子の注釈書では、章段を改行し、章段名を付した上で、明確に区別している。そのため、現在は枕草子の章段を独立的に捉え、前後の章段との連関を考慮することはない。ところが、江戸時代の加藤磐斎『枕草子抄』では、「段」の下位に「節」を設けて、構造的に連関するものとして章段をとらえる。写本や版本では、今日の注釈書のように、明確に章段を区別するレイアウトではない。写本や版本は、章段を句切るために、改行や空格、合点や朱点などを付していることが一般的である。合点・朱点などの本文上の形態を主体とする章段区分と、現在の内容主体の章段区分にはいくつか齟齬があり、章段をどうとらえるかの論理の違いがあると考えられる。そもそも、枕草子や源氏物語の写本や版本では改行されることはほとんどない。歌書のように別ち書きをすることもほとんどない。そのため、文章がどこで区切れるのかよくわからないことが多い。べた書きの写本や版本の文章から、読者はどのように章段や段落の「区切り」を読み取っていたのだろうか。枕草子の場合、改行や合点によってそれら「区切り」が読者に意識できるようになっているものが多いが、源氏物語などの場合はどうなのだろうか。究明が期待される。

2. 研究の目的

枕草子や源氏物語などの平安文学の写本や版本において、形態からどのように「区切り」が意識されているのか明らかにし、その区分意識はいかなる論理に基づいたのかを究明していく。具体的には、(1) 枕草子の章段区分が、江戸時代の注釈書ではどのような理論により成り立っているのかを明らかにする。また(2) 枕草子の写本において章段区分はどのように表現されているのかを明らかにする。最終的には、(3) そもそも平安文学において、文章の区切りや段落区分が、写本や版本でどのように表現されているのかを明らかにする研究へと発展させていきたい。

3. 研究の方法

枕草子の章段区分は、類纂的、随想的、日記的と内容により分類し、章段区分をおこなうことが一般的である。しかし、内容を主として区分する章段区分の考え方は、第二次世界大戦後、池田亀鑑によって示されたものである。現在の枕草子の注釈書では、章段を改行し、章段名を付した上で、明確に区別している。そのため、現在は枕草子

の章段を独立的に捉え、前後の章段との連関を考慮することはない。ところが、江戸時代の加藤磐斎『枕草子抄』では、「段」の下位に「節」を設けて、構造的に連関するものとして章段をとらえる。写本や版本では、今日の注釈書のように、明確に章段を区別するレイアウトではない。写本や版本は、章段を句切るために、改行や空格、合点や朱点などを付していることが一般的である。合点・朱点などの本文上の形態を主体とする章段区分と、現在の内容主体の章段区分にはいくつか齟齬があり、章段をどうとらえるかの論理の違いがあると考えられる。これらの齟齬を明確にするために、『枕草子』であれば、章段区分の一覧表の作成をおこなった。また、文の区切れについては、『絵入源氏物語』をもとに、その改行箇所

4. 研究成果

『絵入源氏物語』の慶安本、万治本、無刊記小本の三本の比較検討によって、改行が文の区切れを表しうることが明らかとなった。ただし、改行がすべからく区切れを表すのではなく、あくまで区切れを表しうるというレベルのものである。また、慶安本の本文を、万治本はそのまま無批判に用いるのに対して、無刊記小本は独自の校訂をおこなっていることがわかった。この独自の校訂は、本文の読みやすさを考えたものであり、決して放逸な校訂ではなかったようで、いくつか文献的な根拠があつての校訂と判断できるものも見られた。

また、字母の分析をすすめていくと、万治本の字母は、慶安本の字母と似通う傾向があるのに対して、無刊記小本は慶安本の字母を改める傾向がある。このことから、小本の制作者は、慶安本の制作者とは同一人物ではなく、また慶安本の文字遣いとは違った傾向の人物であることがわかった。慶安本は山本春正の手によるもので疑いはないが、おそらく無刊記小本も、それなりの『源氏物語』の知識を有した人物であつたと推測できる。

では、この無刊記小本の制作者は誰か、というと、この点は、いまいち判然としなかった。無刊記小本の出版には、吉田四郎右衛門という版元がかかわっていたようである。吉田四郎右衛門は、二十一代集の小型本も出版していることから、古典文学作品の小型本を出版するノウハウがあつた。したがって、『絵入源氏物語』の小型本を出版した蓋然性が高い。問題は、慶安本の小型化を、吉田四郎右衛門が誰に依頼したのか、ということに焦点が絞られてくるが、この件については調査が不足しているため、結論を出すには至らなかった。今後は、二十一代集などの古典作品の小型本の分析や、慶安本と無刊記小本のより詳細な異同の分析などをおこなう必要がある。

枕草子の章段区分は、江戸時代の加藤磐斎

『枕草子抄』では、段があり、その下部に節を設ける分類方法をとっている（沼尻利通「『清少納言枕草子抄』の章段区分方法」『日本文学』第五九巻第五号）2010年5月）。しかし、北村季吟『枕草子春曙抄』は、そのように画然と章段を区分することはなく、類纂的章段を基軸にして、本文と注釈のレイアウトによって文章を区切る方法や、合点、「筆のすさひ」「こと物かたり」と注に付すなどの工夫によって章段を区分していた。近代テキストのように、画然とした区切りではなく、曖昧さを残した区切り方を、『春曙抄』は選択していることになる。

このように、類纂的章段を基軸に章段を区分する方法は、中世の『枕草子』の写本ではよく見られる方法である。例えば陽明文庫蔵本の『枕草子』甲本では、類纂的章段には朱丸印を付し、随想的、日記的章段には朱合点や改行を施すなどの方法により、章段区分を表現していた。陽明文庫本『枕草子』甲本を詳しく検討すると、朱丸印や朱合点のほかに、改行などによって区分するなど、章段区分を様々に示す努力をおこなっていることがわかる。このような本文の整定は、いつ、誰によってなされたのか、よくわからないが、陽明文庫蔵『枕草子』甲本の奥書などから、三巻本の朱丸印や朱合点は、勸修寺教秀によってなされたものであることがわかる。それ以前の三巻本には、このような朱丸印、朱合点は付されていなかったようで、すなわち三巻本の今日のような形態は、勸修寺教秀までしか遡れないことが明らかとなった。三巻本といえ、すぐさま定家整定の本文とされてきたが、実は「朱」という視点からは、さほど古くまでは遡れないのであり、これは本文の問題にも波及すると考えられる。

そのような本文の問題とは別に、章段区分という視点では、『春曙抄』は中世の写本の影響により、画然と章段を区分するのではなく、曖昧さを残した方法を選択したものと考えられる。なお、これら写本や『春曙抄』などの章段区分は、現在の注釈書の章段区分とはいくつか齟齬をきたしているものがあり、今後、検討を要するものである。

以上、古代文学のテキストにおける「区切り」は、さまざまな方法により示されていることが明らかとなった。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕(計 10 件)

沼尻利通、『絵入源氏』三種類の字母「桐壺」巻から、福岡教育大学紀要、査読無、第 62 号 第一分冊文科編、2013 年 2 月、P17～28

沼尻利通、『絵入源氏』三種類の本文表記「桐壺」巻から、福岡教育大学国語科学研究論集、査読有、第 54 号、2013 年 3 月、P41

～56

沼尻利通、『絵入源氏』三種類の本文異同「桐壺」巻から、日本文学論究、査読有、第 72 冊、2013 年 3 月、P30～40

沼尻利通、『絵入源氏』三種類の字母「帚木」巻から、福岡教育大学紀要、査読無、第 63 号 第一分冊文科編、2014 年 2 月、P1～14

沼尻利通、『絵入源氏』三種類の本文表記「帚木」巻から、福岡教育大学国語科学研究論集、査読有、第 55 号、2014 年 3 月、P15～29

沼尻利通、野々口立圃『十帖源氏』の初版と覆刻、雅俗、査読有、第 13 号、2014 年 7 月、P2～13

沼尻利通、既存の研究の見直し（平成二十四(2012)年国語国文学界の動向・中古散文）、文学・語学（全国大学国語国文学会）、査読有、第 210 号、2014 年 8 月、P52～56

沼尻利通、陽明文庫蔵三巻本『枕草子』甲本の朱丸印と朱合点、福岡教育大学国語科学研究論集、査読有、第 56 号、2015 年 3 月、P5～23

沼尻利通、『絵入源氏』三種類の本文異同「帚木」巻から、福岡教育大学紀要、査読無、第 64 号 第一分冊文科編、2015 年 2 月、P1～9

〔学会発表〕(計 0 件)

〔図書〕(計 1 件)

沼尻利通、佐賀大学小城鍋島文庫『十帖源氏』の挿絵と覆刻、小城藩と和歌～直能公自筆『岡花二十首和歌』の里帰り～、査読無、編集：佐賀大学地域学歴史文化研究センター、2013 年 10 月、P44～53

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等
なし

6 . 研究組織

(1)研究代表者

沼尻 利通 (NUMAJIRI, Toshimichi)

福岡教育大学・教育学部・准教授

研究者番号：90587635